

[成果情報名]高冷地のハウス型大型トンネルによる夏秋トマトの新規栽培法

[要約]ハウス型大型トンネルを利用した夏秋トマト栽培は、簡易雨よけ栽培に比べて約2ヶ月収穫期が拡大する。連続Uターン栽培することで約10段果房まで収穫が可能となり、さらに、品種「有彩014」を使用し、全量基肥マルチ下畝内施肥を行うことで増収及び省力化が図られる。

[担当]山梨県総合農業技術センター・高冷地野菜・花き振興セ・岳麓試験地・志村貴大

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

富士北麓地域においてトマトの長期収穫及び収量増加には、ハウス設置が必須である。一方、新規栽培希望者にとって、高額な設備投資が負担となっている。そこで、開発した低コストかつ耐候性のハウス型大型トンネルに適したトマトの生産技術の確立を図り、トマトの長期収穫及び収量増加を図る。

[成果の内容・特徴]

1. 春期の低温時に全面被覆することにより、慣行栽培に比べ、定植時期を約1ヶ月前進化することができ、6月からの収穫が可能となる（図1）。
2. 気温が低下する秋期には、夜間全面被覆することにより、慣行栽培に比べ、収穫を約1ヶ月後半に伸ばすことができる（図1）。
3. 誘引方法は、1条2本仕立てとし、連続Uターン誘引を行うことで、果房を約10段果房（株あたり約20房）まで収穫が可能となる（図2）。
4. 慣行栽培と比べ、栽植本数を約40%削減できる一方で、単位面積あたり同等以上の収量が確保できる（表1、図3）。
5. 慣行栽培の収量は、8月に8割程度集中するが、大型トンネル栽培では、収穫時期の分散化が可能となる（図3）。
6. 慣行品種「麗容」に比べ、「有彩014」の方が収量が増加する（図3）。
7. 緩効性肥料の全量基肥マルチ下畝内施肥（N30kg/10a）により、施肥の省力化が可能となる（図4）。

[成果の活用上の留意点]

1. 試験は高冷地野菜・花き振興センター岳麓試験地（標高820m）で行った。
2. 黒マルチ（幅135cm）を使用し、被覆資材は幅3mの透明ビニールを使用した。
3. 基肥に速効性肥料を用いて、多肥にした場合、茎が折れやすく誘引しにくい。
4. 高温時の日焼け果が多発する場合、寒冷紗を随時被覆すると良い。
5. 換気を適宜行うとともに、病虫害の適期防除を実施する。

[期待される効果]

1. 高冷地トマト栽培において、低コスト高収益栽培が可能となり、高齢者や新規参入者が品目導入しやすくなる。
2. ビニールで施設全体の被覆が容易にできるため、気象災害の被害が軽減される。

[具体的データ]

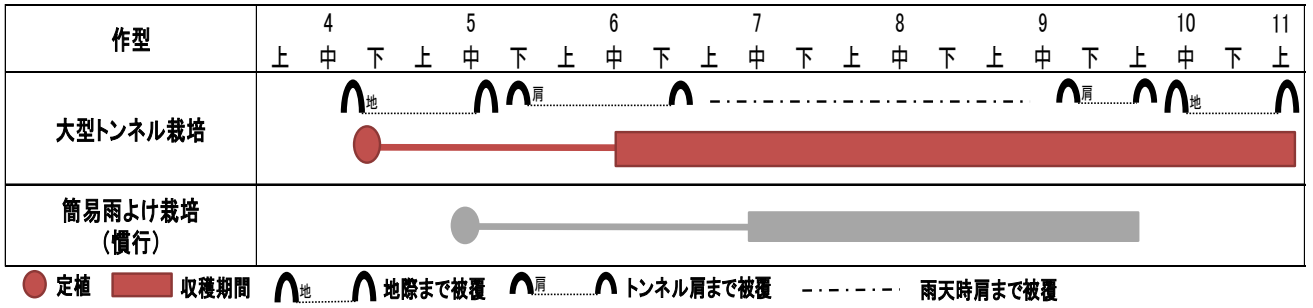


図1 大型トンネル栽培と簡易雨よけ栽培（慣行）の作型

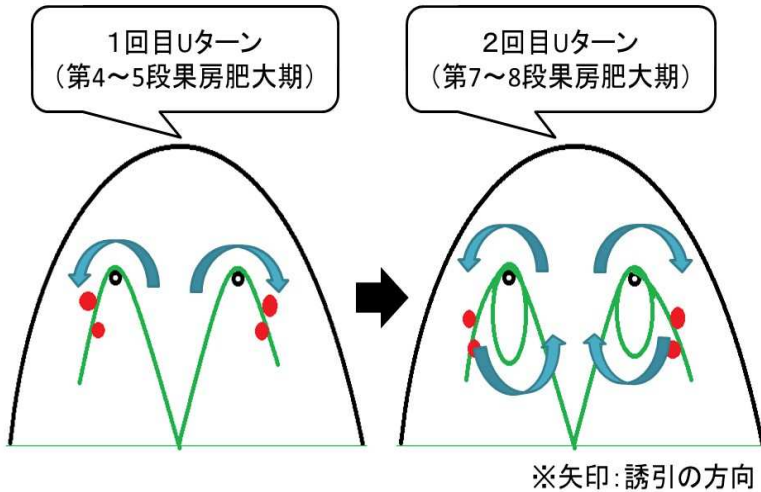


図2 大型トンネル栽培の整枝・誘引方法

表1 大型トンネル栽培と慣行栽培の栽植方法

栽培方法	定植	株間 cm	畝幅 m	栽植本数 株/10a	仕立て 本/株	誘引
大型トンネル	1条	40	2.1	1,190	2	連続Uターン
簡易雨よけ (慣行)	2条	50	2	2,000	1	直立誘引

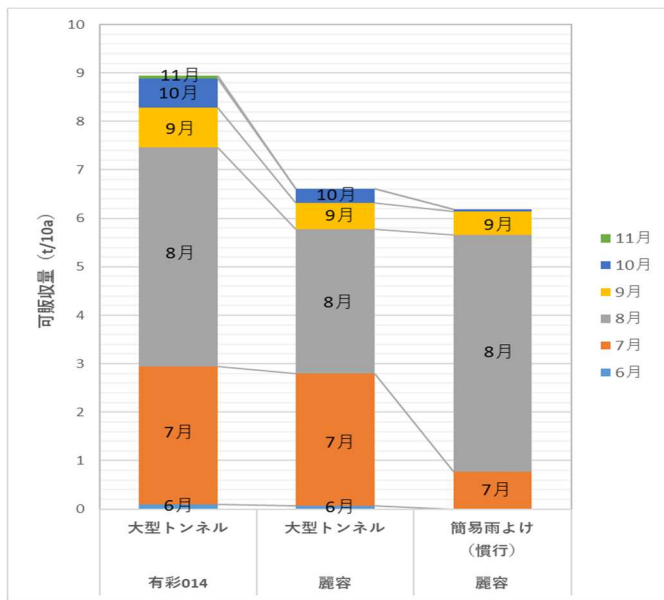


図3 慣行作型と新作型の収量比較及び品種比較 (2019)

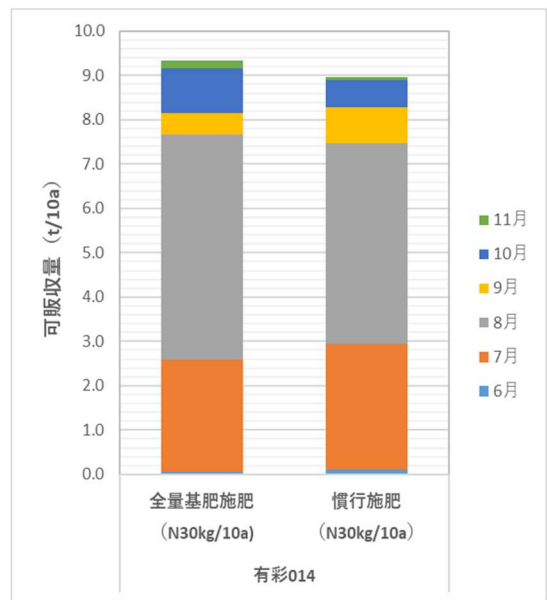


図4 慣行施肥と全量基肥施肥比較 (2019)

[その他]

研究課題名：富士山やさい生産に適した低コスト施設による新規栽培法の開発

予算区分：県単（重点化） 研究機関：2017年～2019年

研究担当者：志村貴大、渡辺淳、長坂克彦、五味敬子